



発行 社団法人 日本品質管理学会
 東京都杉並区高円寺南1-2-1 (財)日本科学技術連盟東高円寺ビル内
 電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507
 ホームページ:www.jsqc.org/

CONTENTS

- 1-トピックス ISQFD2007ルポ
- 2-私の提言 日本の品質は誰が作るのか?
- 2-ルポルタージュ 第324回関西事業所見学会ルポ
- 3-第326回中部事業所見学会ルポ/9月入会者紹介/デミング賞ほか
- 4-行事案内/各賞表彰/第37年度役員体制役割分担

ISQFD2007ルポ

山梨大学 吉川 雅修

第13回品質機能展開(QFD)国際シンポジウムが、2007年9月7日と8日の両日、米国のヴァージニア州ウィリアムズバーグで開催された。会場は歴史地区コロニアル・ウィリアムズバーグにあるWoodlands Conference Center だった。参加者は米国、ブラジル、カナダ、メキシコ、エクアドル、ドイツ、オランダ、スペイン、スウェーデン、中国(香港を含む)、タイ、日本から集まった。

初日午前中はチュートリアルで、Richard Zultner氏(Zultner & Company)がAHP (Analytic Hierarchy Process) について、Greg Yezersky氏 (Institute of Professional Innovators) がGTI (General Theory of Innovation) に関して解説した。

初日午後は3件の基調講演と3件の論文発表が行われた。基調講演では、まずGlenn Mazur氏が品質革命と題して、品質向上の技術と消費者の選択可能性の進化を植民地の独立戦争の過程になぞらえて語った。次に赤尾洋二先生が指静脈認証装置の開発を題材としてQFDとナレッジマネジメントについて講演した。そして、AHPの開発者であるピッツバーグ大学のThomas L. Saaty 教授が、AHPからANPまでの展開と活用について興味深い講演を行った。Saaty 教授は、講義において学生の興味を繋ぐために用いるジョークの一端も

紹介した。

初日の最終セッションは当地コロニアル・ウィリアムズバーグにちなみものまね俳優による米国第3代大統領トーマス・ジェファースンの『基調演説』の熱演だった。続いて赤尾賞の授賞式が行われ、Thomas L. Saaty 教授に赤尾賞が授与された。AHPを活用する多数の参加者が教授と一緒に

写真に納まったり、教授の著書にサインを貰ったりしていた。もちろん報告者も例外ではなかった。また、香港理工大学のCatherine Y. P. Chan氏に対して赤尾奨学金が受給された。

2日目は主として2会場に分かれてのテクニカルセッションだった。理論的發展や適用事例を交えた論文発表が初日に行われた3件と合わせ全体で22件行われた。発表者の所属は日本、米国、ドイツ、中国、ブラジル、スペイン、スウェーデンとなっていた。

発表論文の分野を次のように列挙すると、研究の広がりが見える：航空宇宙産業(1)、ビジネスプロセス(1)、教育(3)、公共事業(1)、技術革新(1)、統合的手法(3)、Kanoモデル(1)、AHP (1)、ライフサイクル管理(2)、食品加工工業(1)、ソフトウェア/IT(4)、通信産業(2)、物流管理(1)。カッコ内は件数である。国別では日本からの発表が8件で最も多かった。日本から



Saaty氏(左)、赤尾氏(中)、Mazur氏(右)

の発表は航空宇宙産業、ビジネスプロセス、Kanoモデル、ライフサイクル管理、統合的手法、ソフトウェアの分野に含まれている。

今回のシンポジウムの特徴としては、このように日本からの多種多様な研究発表が目立ったこともひとつであるが、分野としては近年の産業の動向に合わせて情報・通信や教育に対する理論的あるいは実践的な展開の発表が多かったことも挙げられるだろう。

やや残念な点は最近のISQFDの中では参加者数がやや少なく感じられ、一部のセッションでは発表質疑の盛り上がり欠けた点である。

全セッションの終了後、Christina Campbell's Tavernでの18世紀の雰囲気漂うディナーパーティーをもって今回のシンポジウムは幕切れとなった。次回のシンポジウムは2008年9月に中国の北京で開催される予定である。

● 私の提言 ●

日本の品質は誰が作るのか？

南山大学 数理情報学部 准教授 松田 眞一



普通、品質を作るのは誰かと問われると「全社員」でというのがお決まりの答であろう。本当にそうである

うか？

昨今様々な品質問題がニュースになっている。それらは大きく分けると2つの問題に分けられる。第一は機械的・システム的な問題で、改善によって作り込んでいくことで解決に向かっていくものである。第二は人為的な問題である。ニュースで取り上げられる問題では特に後者が増えている。

第一の問題に関しては基本的に全社員が一丸となって取り組むべき問題で

あるので上に挙げた答に行き着く。しかし、システム的な問題に関しては多分に人為的な側面もあり得るので第二の問題と同じことになる場合もある。たとえば、情報漏洩問題ではシステムとして情報管理がよくないことが原因に挙げられるが、その状態を放置していたのであれば人為的な問題でもある。

一方、第二の問題に関しては個人個人の責任に帰するものもあり、そういう場合は全社員の意識の向上という第一の問題に似た答になるが、「情報漏洩で派遣社員が…」ということになるとそもそもシステムとしての問題であり、意識の向上では済まされない構造的な欠陥があると言わざるを得ない。そして、第二の問題の多くは組織としての品質意識の欠如から来ているもの

であり、抜本的な改革を行わないと品質の向上は望めない。そうすると品質を作る責任はトップにあると言える。特に従来通りのこととして行ってきた方式が批判の下にさらされることが増えており、トップの責任はとても重大であろう。その上、品質問題が発覚したときにはその対応を行うのもトップであり、危機管理能力まで問われることになる。

さて、第一の問題で結局号令をかけるのがトップであるなら、2つの問題とも品質を作るのは「トップ」という答になりそうであるが、そうではない。トップに元々品質の向上心があるなら問題など起こさないからである。トップを動かすには結局、品質問題を解決しないと儲からないという考えを起こさせることである。そのためには消費者が多少値段が高くても質のいいものを求めるという姿勢を示すことである。この提言をお読みの方には「品質は消費者が作る」という意識を是非持ってもらいたい。

第324回関西 事業所見学会 ルポ

積水化学工業(株) 滋賀栗東工場

2007年6月12日(火)に、第324回事業所見学会が「技術者育成と技能伝承を目指すプロフェッサー制度～モノづくり革新に向けた技術・技能伝承への取り組み～」をテーマに標記工場にて予定を上回る37名の参加者で開催された。会場には安全・品質・5S・設備保全・顧客満足を呼びかけるためのポスター・旗・のぼり等が所狭しと掲示してあった。

まず、三宅工場長始め関係者の方々より説明があった。同工場は1960年開設の由緒ある事業所で、敷地は16万㎡あり塩ビパイプを中心とした生産を行っている国内屈指の工場である。1998年以降新規採用がなく、2015年までに多数の退職者が出ると予想でき、優秀なベテラン社員層が薄くなることから、技能の伝承や技能者の育成のため「栗東積水プロフェッサー制度」を創り、認定された社員がものづくりのプロになるためのいろいろな仕掛

けを行っている。この制度は、①必要な固有技能をすべてリストアップし、②技能レベルを5段階で数値化し、③技能レベルが一定の水準に達した社員を「プロフェッサー」や「マイスター」に認定する。

工場建屋の前では、社員手作りの琵琶湖水辺の様子を模したビオトープがあり、河川の掃除を環境ボランティアとして行っているのを聞き、環境管理にも強く取り組まれているのがわかった。SPR工法やオメガライナー工法という環境にやさしい下水管路更正工法の説明を受けた。主力製品の塩ビパイプ製造工場では、「改善提案」の掲示スペースが設定されており、「Q・C・S・D」に分類され評価されていた。パイプの横送りラインの作業床には従業員の手書きで「近江八景」が描かれ、汚れることなく維持管理されており5Sにも注力されている。デミング賞やTP賞受賞でわかるように、以前からTQCやQCサークル活動、TPM活動に取り組まれているのもわかり、技術・技能伝承への取り組みをはじめ何事においても仕組みを作り、成果を得られているお手本にしたい工場だった。

高馬 勇 (株)タクミナ

第326回中部 事業所見学会 ルポ

津田工業(株) 豊川工場

さる平成19年9月11日(火)に第326回事業所見学会(中部支部第82回)が、津田工業(株)豊川工場にて開催され、『顧客の生命、財産に重大な影響を及ぼす商品品質を考える「津田方式による未然防止の実践活動」』のテーマの下、60名が参加した。今回の見学会は、7月開催のシンポジウムでの都築社長の同テーマでの事例講演内容について、実際にその現場を見学して理解を深めることが狙いであった。

同社は、昭和9年創業後、主に高品質・高精度が要求される自動車用駆動系、ボデー・シャシー系部品等の製造販売を通じて、その卓越した技術力(冷間鍛造・樹脂成形・精密切削)の蓄積をもって成長を続けてきた企業である。現在では、国内・海外あわせて5拠点(刈谷・豊川・富山・タイ・中国)を持つ。

見学に先立ち、柘植常務より同社の製品は大半が車両の「走る」「曲がる」「止まる」に関する重要機能部品、

という背景と共に、不具合流出による市場での重大事故回避が同社の使命であることを踏まえた独自の手法(津田方式)が改めて紹介された。

見学では、各生産工程における画期的な管理・改善手法として、①QRコードと分光分析のダブルチェックによる異材混入防止管理体制の整備、②大型6段フォーマーライン導入による工程数の大幅削減、③ダントツ品質工程におけるチーム活動による不良低減の見える化、④4M変化点管理板による変化点と対応の明確化などが事例をもって説明され、同社の品質・生産性の向上への強い姿勢を印象付けられた。また、⑤津田方式モデルラインにおいては、標準類、不具合サンプルなどに重要管理マーク【!!!】が明示されており、シンポジウムでの講演内容について理解が深まったことで、参加者も大いに満足していた。

今年度より新企画として開催してきた「参加者意見交換会」も今回で3回目を数え、活発な意見交換の下、参加者の相互啓発の一助となり、事業所見学会の中に定着してきたとの感触を得た。

築山浩克(トヨタ紡織(株))

2007年9月の 入会者紹介

2007年9月13日の理事会において、下記の通り正会員20名、準会員19名の入会が承認されました。

(正会員20名) ○佐藤 諒一(テイケイ気

化器) ○皆川 一二(デンソーテクノ) ○Bjoern Christian Frank(東京工業大学) ○米田 昭彦(播州電装) ○森 弘之(オムロン) ○新田 雄一(日立コミュニケーションテクノロジー) ○萩原 健茂(協和発酵工業) ○日高 裕司(扶願堂高木病院) ○坂寄 寛幸・本田 忠行(ソニー) ○田名網 功(高岳製作所) ○須藤 秀一(献

心会川越胃腸病院) ○島田 尚徳(日本科学技術連盟) ○坂川 邦男(アドマテックス) ○石川 勉(アイシン・エイ・ダブリュ) ○高尾 雅文(関西電力) ○渡津 猛(ビューコス) ○領木 誠一(誠仁会りょうき歯科クリニック) ○国安 章男(日本信号) ○加藤 裕幸(ケイ・オブティコム)

(準会員19名) ○木村 俊之・穴吹 幸一郎・阿部 玄太郎・上野 俊哉(青山学院大学) ○山本 美奈・小崎 雄大・奈良亜美(名古屋工業大学) ○久保田 一樹・岩崎 晃(電気通信大学) ○坂本 真一・下林 里史・大迫 勇太(早稲田大学) ○佐々木 航平・大久保 俊介・内藤 陽太(武蔵工業大学) ○水野 圭・中西 慶彰・櫻井 守(筑波大学) ○宇都宮 唯(東京工業大学)

デミング賞委員会(委員長 御手洗 富士夫)において、2007年度の日本品質管理賞、デミング賞各賞、日経品質管理文献賞の受賞者が決定し、授賞式は11月14日経団連会館にて執り行われました。

1. 日本品質管理賞

マヒンドラ アンド マヒンドラ株式会社 農業機械事業部(インド)

2. デミング賞本賞

牛久保 雅美 氏 サンデン株式会社 代表取締役会長

3. デミング賞実施賞

旭インディア硝子株式会社 自動車ガラス事業部(インド)
ラネ(マドラス)株式会社(インド)

4. 日経品質管理文献賞(文献名五十音順)

- (1) 「強みを磨き弱みを改革 限らないダントツ経営への挑戦」
坂根 正弘 著
- (2) 「教育の質向上のための品質システム工学的データ分析
-個人差の解析を中心として-」 椿 美智子 著
- (3) 「マネジメントシステムの審査・評価に携わる人のための TQMの基本」
中條 武志、山田 秀 編著、(社)日本品質管理学会 標準委員会 編

正 会 員 : 2948名

準 会 員 : 106名

賛助会員 : 179社206口

公共会員 : 22口

行 事 案 内

●第118回シンポジウム (本部)

テーマ：質マネジメントシステムと第三者審査の質向上
一審査員の目から見た組織の目的を達成する方法とは何か、組織に受け入れられる審査技術とは何か

日 時：2007年12月15日(土) 9:55~16:50

会 場：日本科学技術連盟

東高円寺ビル 2階講堂

定 員：150名

参加費：会 員5,000円 (締切後5,500円)

QMS部会員3,000円 (締切後3,500円)

非会員7,000円 (締切後7,500円)

準会員2,500円 一般学生3,500円

申込締切：2007年12月7日(金)

プログラム：

特別講演「JIS Q 17021：2007の制定について」

亀山嘉和氏

(財)日本適合性認定協会)

活動概要「当部会の役割と今後の方針について」

福丸典芳氏 (部会長、(有)福丸マネジメントテクノ)

情報提供「ISO9001改訂の動向」

平林良人氏

(副部会長、(株)テクノファ)

WG1「有効性の向上に繋がる審査技術1」の提案

田中完治氏 (株)マネジメントシステム評価センター)

WG4「有効性の向上に繋がる審査技術2」の提案

上月宏司氏

(株)ケイ・シー・シー)

WG5「組織の目的に寄与する審査とは！—企業カルテの提案—」

鈴木昌栄氏

(財)建材試験センター)

WG2「経営に役立つ内部監査」

及川忠雄氏

(QKマネジメント研究所)

WG3「質マネジメントシステムの成熟度アップの提案」

松田啓寿氏

(財)日本科学技術連盟)

申込方法：

10月送付の参加申込書にご記入の上、本部事務局までお申し込みください。ホームページからも申し込みできます。

<http://www.jsqc.org/q/news/events-list.html>

行 事 申 込 先

JSQCホームページ：www.jsqc.org/

本部：166-0003 杉並区高円寺南1-2-1

(財)日本科学技術連盟

東高円寺ビル内

(社)日本品質管理学会

TEL 03-5378-1506

FAX 03-5378-1507

E-mail：apply@jsqc.org

事務局携帯：090-9128-7979

第37年度役員体制決まる

去る10月27日に開催された第37回通常総会において新役員が選出承認され、第37年度の役員体制は以下のとおり決まった。

会 長	◇ 圓川 隆夫	東京工業大学 教授
副会長	◇ 大沼 邦彦	㈱日立製作所 代表執行役 執行役副社長
理 事	◇ 中條 武志	中央大学 教授
理 事	安藤 之裕	技術士
理 事	岩崎日出男	近畿大学 教授
理 事	大藤 正	玉川大学 教授
理 事	釜谷 佳男	富士ゼロックス㈱ 品質管理部
理 事	小大塚一郎	(財)日本科学技術連盟 事業部長
理 事	鈴木 和幸	電気通信大学 教授
理 事	鈴木 秀男	筑波大学 准教授
理 事	瀧沢 幸男	日野自動車(株) グループ長
理 事	椿 美智子	電気通信大学 准教授
理 事	永原 賢造	(株)リコー 顧問・技師長
理 事	根岸 達夫	キヤノン㈱ 品質標準センター 所長
理 事	橋本 進	(財)日本規格協会 研修事業部長
理 事	細谷 克也	品質管理総合研究所 代表取締役社長
理 事	松田 真一	南山大学 准教授
理 事	棟近 雅彦	早稲田大学 教授
理 事	山本 涉	電気通信大学 講師
理 事	渡邊 浩之	トヨタ自動車(株) 技監
学会理事	近藤 賢	積水化学工業(株) CSR部
学会理事	瀬崎 操	(株)ブリヂストン 主任部員
学会理事	新家 達弥	㈱日立製作所 品質管理センター長
監 事	藤井 暢純	サンデン(株) 理事
監 事	神田 範明	成城大学 教授
監 事	大野 正直	日本ガイシ(株) 参与
顧 問	飯塚 悦功	東京大学 教授
顧 問	桜井 正光	(株)リコー 代表取締役 会長執行役員

第37年度役員役割分担表

論文誌編集	◎棟近 ○永田
学会誌編集	◎瀧沢
広 報	◎根岸
事 業	◎大藤
研 究 開 発	◎椿(美)
規 定	◎橋本
会員サービス	◎釜谷
選 挙 管 理	◎大沼
庶 務	◎鈴木(秀) ○新家
会 計	◎小大塚
最優秀論文賞/研究奨励賞	◎中條 ○棟近
品質技術賞	◎大沼 ○瀧沢
品質管理推進功労賞	◎大沼 ○鈴木(秀)
国 際	◎安藤
標 準	◎永原
総合企画	◎圓川 ○永原
Web特別	◎山本
研究助成特別	◎松田
ANQ支援特別	◎安藤 ○飯塚(悦)
QC相談室特別	◎岩崎(日)
中部支部	◎渡邊 松田 大野
関西支部	◎細谷 岩崎
ソフトウェア部会	◎兼子 ○笹部 ○板倉
QMS有効性および審査研究部会	◎福丸 ○平林
医療の質・安全部会	◎棟近 ○水流 ○永井(庸)

◎委員長、支部長、部会長 ○副委員長、副部会長

各賞表彰

第37回通常総会において、第37年度研究奨励賞1件、品質技術賞1件、ならびに品質管理推進功労賞3氏の授章および表彰が行われた。

研究奨励賞

『L₃₆直交配列表に6水準因子を割り付ける方法』

北村尚久氏 (東京工業大学)

「品質」Vol.36, No.4, pp. 107-113 (2006)

品質技術賞

『アンケート調査に基づく顧客潜在ニーズの抽出』

坂田理彦氏 (セントラルメルコ(株))

「品質」Vol.37, No.2, pp. 68-79 (2007)

2007年度 品質管理推進功労賞

加藤裕幸氏 (株)ケイ・オプティコム

葛谷和義氏 Office SQC

瀬崎操氏 (株)ブリヂストン